

筒井政憲は安永7年(1778)旗本久世三四郎広景の次男として江戸に生まれ、初名を右馬助・子恒・右次右衛門と名乗った。官名は伊賀守、紀伊守、和泉守、肥前守とたびたび変わった。

寛政10年(1798)、21歳の時に旗本筒井正盈の養子となり、その娘を妻とした。若年の頃は柴野栗山に学び、昌平坂学問所で頭角をあらわした。

筒井家は、戦国時代の大和一国の武将筒井順慶の家系である。昌平坂学問所に学び頭角を現わし、文化7年(1810)西ノ丸留守居となるとともに学問所御用を兼帯、9月西ノ丸徒頭、同10年西ノ丸目付、同12年目付、同14年長崎奉行となり、文政4年(1821)正月29日に町奉行に就任している。冒頭の通り町奉行となっている。

筒井が町奉行の座を追われたのは天保12年(1841)だから実に20年もの間、南町奉行を勤めた。

この間、近藤重蔵・富蔵殺傷の一件、仙石騒動の審理、天保の飢饉対策などの民政に関わり、名奉行と称された。

五郎左衛門の与力として出仕していた40年間のうち半分以上は筒井に仕えていたことになる。特に最後の数年間は年番方、いわばNO.2として筒井を支えた。

天保12年(1841)4月28日に罷免され後、西ノ丸留守居へ転じ、水野忠邦の天保の改革期には冷遇されたが、水野は僅か2年で挫折し、土井利位が老中首座を勤めた。

その後再び老中首座に返り咲いた忠邦は8カ月で再辞職し、弘化2年2月阿部正弘が老中首座となった。

折しも対外危機が迫っており、外交問題はとりもなおさず内政問題で、対外交渉において国内世論不一致があれば、外圧よりも内政から敗れることを知っていた正弘は親



藩中心に外様雄藩の開明的有力大名を配し、幕臣のうちから優秀な新官僚を続々と登用した。その一人が筒井政憲である。

政憲は、阿部正弘の信任をうけて頻繁に外交策の諮問を受け、外国船打払の復活などの強硬策に一貫して反対し続けた。

弘化2年(1845)学問所御用、同4年西の丸留守居となり海防政策の立案に参画し

た。ロシア使節プチャーチンが長崎に来ると、嘉永6年(1853)に大目付格のロシア使節応接掛として、川路聖謨とともに長崎に赴いて交渉した。

また翌安政元年(1854)下田に再来航し

たプチャーチンと交渉し、日露国境の確定と下田・箱館・長崎三港の開港を骨子とした日露和親条約の締結にこぎつけた。

安政2年（1855）、講武所御用、同4年（1857）槍奉行となり、高齢をおして海外・外国人応接・軍政改革・蕃書調所御用に奔走した。

なおこの間に、嘉永元年に「武蔵国風上記之内御府内之部」、同3年に「御鹿狩之事類」を編集し、同5年には将軍に「論語」の講釈を行うなど、儒者としての能力も示している。

安政6年（1859）6月8日、82歳で没し日蓮宗常圓寺（新宿区西新宿7-12-5）に葬られた。法名は政憲院殿仁徳誠功日学大居士。